

アンケート調査報告 —女子高校生と「国語」—

本 郷 明 美

はじめに

昭和53年8月30日に高等学校学習指導要領の改訂と学校教育法施行規則の一部改正が行なわれ、昭和57年度から学年進行をもって、新しい教育課程の基準が実施されている。国語の改善の基本方針としては、「小学校、中学校及び高等学校を通じて、児童生徒の発達段階に応じて、内容を基本的な事項に精選するとともに、言語の教育としての立場を一層明確にし、表現力を高めるようにする。その際、小学校及び中学校においては、国語力を養うための基礎となる言語に関する事項が系統的に指導できるようにし、高等学校においては、それが発展的に指導されるようにする。」ということがたてられ、「現行の『現代国語』と古典に関する科目の基本的な内容を整理して『国語Ⅰ』を新設し、これを低学年において全員に履修させる」ことになっている。またこの「国語Ⅰ」に引き続いては「国語Ⅱ」を全ての生徒に履修させることが望ましく、この2科目によって「国語の基礎的・基本的な能力が身につくようにするとともに、『国語表現』『現代文』及び『古典』を設け、生徒の興味・関心、能力、適性、進路等に応じて選択履修できるように」されている。(注1)

ところで、58年度は1・2年生が新しい教育課程のもとに学習を進めているわけであるが、「国語」を言語として学び、表現力を高めようという教師側の働きかけに対して、生徒はどの程度応え得る体制ができているものなのだろうか、又、自らの国語力についてどのように考えているのだろうか。生徒の実態を知りたく、次の2点についてアンケート調査を行なった。1点は辞書についてである。「語句の意味、用法などを理解し、語彙を豊かにする」(注2)のために欠くことのできない辞書の利用の実態がいかなるものであるかということを探ってみた。もう1点は表現力についてである。今、能力の向上を特に求められている表現力。生徒は、自らの表現力——「話すこと」「書くこと」についてどのように思っているかということを探ってみた。

調査は本年6月下旬、私立某女子高校生1年107名、2年99名、3年107名を対象として行なった。尚、この生徒の殆どが上級学校への進学を希望している。

1. 辞書について

『ことば2号』に於て、「辞書にみる女性」をテーマとして、国語辞典の共同研究を試みた。その中で、国語辞典の用例の中に見られる男女という2つの性の扱いは、現在の社会の姿そのまま、或いは旧態依然たるものであり、不公平の観を免れ得ないという主旨のことを記した。このことは、辞書を最もよく利用するのが、国語力を身につける途上にある。しかも次代を担う小学生・中学生・高校生であることを考えた場合、重大な問題であるといえる。しかし、振り返って考えてみるに、現在の生徒たちは辞書をどの位利用しているのか、自らの国語力を高めることに十分供しているのか、これは疑問が残るところである。教科書には、各教材の終わりに注意すべき語句がまとめられているが、それを調べてくる生徒は僅かである。文章の大体の内容さえわかれば、特殊なことばも気に留めるに足りない様子だ。古文・漢文の学習でも、口語訳を書き取ることには実に熱心であるが、どの語句がどの口語訳に相当するかについては無頓着な面が多々見受けられる。そこで、国語科に関係する国語辞典・古語辞典・漢和辞典の他に参考として英和辞典を加えた4種の辞書について、次の8項目の質問を試みた。

質 問

① 次にあげる辞書を持っていますか？

		国語辞典（単位：人）			
		1 年	2 年	3 年	計
1	いる	106	99	103	308
2	いない	0	0	3	3
無 効		1	0	1	2

② その辞書はどこにありますか？

1	家にあり、使う時には学校に持って行く	22	18	5	45
2	学校にあり、たまに持ち帰る	0	1	0	1
3	家に置いたままである	81	74	98	253
4	学校に置いたままである	2	1	0	3
5	家と学校に各々ある	2	5	4	11
無 効		0	0	0	0

③ その辞書はいつ利用しますか？（複数解答可）

1	予習の時	91	64	49	204
2	授業中	12	2	4	18
3	復習の時	24	21	12	57
4	試験前	41	58	21	120
5	受験勉強、その他	17	20	62	99
6	利用せず	2	3	16	21
無 効		0	0	1	1

④ 最もよく利用するのはいつですか？

1	予習の時	78	45	28	151
2	授業中	2	1	0	3
3	復習の時	4	9	3	16
4	試験前	16	41	10	67
5	受験勉強、その他	5	3	48	56
無 効		2	0	18	20

⑤ 最もよく利用する時に辞書を引く度合はどれ位ですか？

1	多い	18	20	8	46
2	どちらかというとき	31	26	21	78
3	どちらかというとき少ない	41	38	34	113
4	少ない	16	14	33	63
無 効		1	1	11	13

古語辞典（単位：人）				漢和辞典（単位：人）				英和辞典（単位：人）			
1 年	2 年	3 年	計	1 年	2 年	3 年	計	1 年	2 年	3 年	計
106	99	106	311	103	95	104	302	106	99	102	307
0	0	1	1	2	3	3	8	0	0	2	2
1	0	0	1	2	1	0	3	1	0	3	4
50	25	13	88	14	8	2	24	27	17	24	68
17	1	1	19	0	0	0	0	0	1	1	2
7	67	76	150	86	85	102	273	52	16	21	89
13	1	3	17	1	2	0	3	0	4	0	4
19	5	12	36	3	0	0	3	28	61	60	149
1	0	2	3	3	4	3	10	0	0	1	1
50	34	46	130	36	27	27	90	101	89	99	289
92	8	15	115	3	1	2	6	35	57	71	163
23	17	20	60	10	10	4	24	30	31	60	121
26	37	31	94	18	18	13	49	43	42	58	143
5	8	44	57	13	21	41	75	24	24	76	124
0	31	25	56	41	40	39	120	0	0	0	0
0	0	1	1	2	3	3	8	0	0	0	0
22	36	28	86	38	26	17	81	85	73	69	227
73	4	3	80	0	0	1	1	4	8	14	26
5	8	9	22	8	4	1	13	3	2	2	7
7	29	18	54	18	22	11	51	5	6	7	18
0	11	31	42	20	27	45	92	5	4	11	20
0	11	18	29	23	20	32	75	5	6	4	15
15	10	5	30	4	3	2	9	75	58	60	193
39	10	20	69	6	3	6	15	25	29	36	90
41	25	36	102	16	21	14	51	5	8	9	22
11	46	36	93	76	59	66	201	1	3	2	6
1	8	10	19	5	13	19	37	1	1	0	2

⑥授業の時、すぐ引けるように机の上に置きますか？

		国語辞典（単位：人）			
		1 年	2 年	3 年	計
1	いつも置く	5	2	3	10
2	たいてい置く	3	1	1	5
3	たまに置く	10	7	4	21
4	置かない	81	87	91	259
無 効		8	2	8	18

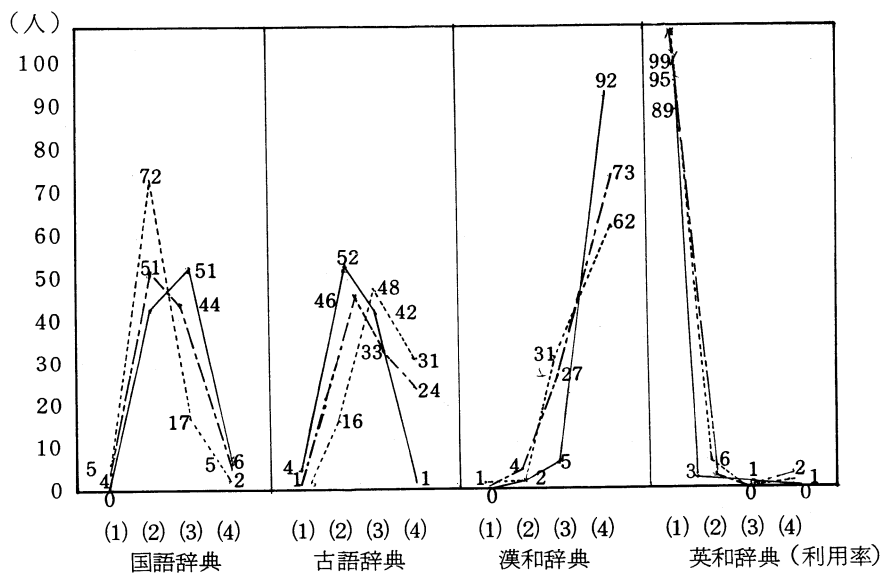
⑦辞書の必要性をどの位感じますか？

1	大に感じる	54	49	38	141
2	ある程度感じる	46	48	51	145
3	あまり感じない	7	1	14	22
4	患しない	0	0	2	2
無 効		0	1	2	3

⑧国語辞典・古語辞典・漢和辞典・英和辞典を利用率の高いものから順に並べるとどうなりますか？

1 年（単位：人）		2 年（単位：人）		3 年（単位：人）	
(1) (2) (3) (4)		(1) (2) (3) (4)		(1) (2) (3) (4)	
英→古→国→漢	4 9	英→国→古→漢	4 8	英→古→国→漢	4 1
英→国→古→漢	4 0	英→国→漢→古	2 3	英→国→古→漢	3 0
英→古→漢→国	3	英→古→国→漢	1 4	英→国→漢→古	2 1
英→漢→古→国	2	国→英→漢→古	5	英→古→漢→国	4
古→英→国→漢	2	英→古→漢→国	2	国→英→古→漢	2
古→国→英→漢	1	英→漢→国→古	2	英→漢→国→古	2
古→英→漢→国	1	古→国→漢→英	1	国→古→漢→英	1
英→国→漢→古	1	漢→英→国→古	1	国→英→漢→古	1
無 効	8	無 効	3	古→漢→国→英	1
				英→漢→古→国	1
				無 効	3

古語辞典（単位：人）				漢和辞典（単位：人）				英和辞典（単位：人）			
1 年	2 年	3 年	計	1 年	2 年	3 年	計	1 年	2 年	3 年	計
51	1	4	56	5	1	2	8	28	29	41	98
38	1	6	45	2	1	0	3	8	19	30	57
11	5	14	30	4	1	1	6	23	23	16	62
6	88	76	170	84	91	94	269	41	28	19	88
1	4	7	12	12	5	10	27	7	0	1	8
75	29	37	141	16	13	7	36	103	89	97	289
30	49	40	119	39	35	41	115	4	8	8	20
2	14	21	37	38	37	45	120	0	1	1	2
0	5	8	13	13	10	11	34	0	0	1	1
0	2	1	3	1	4	3	8	0	1	0	1



注 — 線 1 年 線 2 年 - - - 線 3 年

各辞典について利用率の(1)に挙げた人、(2)に挙げた人、(3)に挙げた人、(4)に挙げた人の数を学年毎に合わせて、グラフにしたものである。

アンケート調査の結果について簡単に触れておこう。調査した4種の辞書をほぼ全員の生徒が所有している。では、その辞書はどこにあり、いつ、どの位利用しているものなのか。まず質問②「どこに辞書があるか」だが、結果を見ると大変面白い傾向を見出すことができる。国語科関係の3つの辞書が学年を遂うに従って、「家にあり、使う時には学校に持って行く」という解答が減少し、「家に置いたままである」が増加するのに対して、英和辞典は「家に置いたままである」が減少し、代わりに「家と学校に各々ある」が増加しているのである。英語は、高校段階で新たに学習することが多く、不可欠なものとして常に手元に置いておく——つまり、家と学校に各々辞書を置いておくことになる。そして、自然と辞書は多用され、生徒は、大学入試問題に見られるような非常に難解な文章をも読解するまでに至るのである。これに比べ、国語科関係の辞書は生徒の手元からどんどん離れていく。それは、国語力が十分身についたため、さほど苦労することもなく文章を理解することができるようになったことによるのであろう。しかし、高校になって本格的な学習が始まる古文・漢文を考えた場合、辞書なしの状態では学習が成立するとは考えがたい。次に、質問③「いつ利用するか」であるが、複数解答をしてもらった結果をまとめて1位と2位を示すと以下ようになる。

国語辞典	1年	① 予習時	91人	② 試験前	41人
	2年	① 予習時	64人	② 試験前	58人
	3年	① 受験勉強その他	62人	② 予習時	49人
古語辞典	1年	① 授業中	92人	② 予習時	50人
	2年	① 試験前	37人	② 予習時	34人
	3年	① 予習時	46人	② 受験勉強その他	44人
漢和辞典	1年	① 利用せず	41人	② 予習時	36人
	2年	① 利用せず	40人	② 予習時	27人
	3年	① 受験勉強その他	41人	② 利用せず	39人
英和辞典	1年	① 予習時	101人	② 試験前	43人
	2年	① 予習時	89人	② 授業中	57人
	3年	① 予習時	99人	② 受験勉強その他	76人

古語辞典の1年の利用が授業中に集中したのは、はじめて古語辞典を利用する

ということで、授業中頻繁に引かせるよう指導したことによる。漢和辞典の利用は、全学年とも40%前後の生徒が全くない。これはある程度予想していたことではあったが、やはり驚きを禁じ得ない。古語辞典も、1年では「利用せず」が0であったのに対して、2・3年では31人、25人という数が得られた。教師が主となった解釈に終始しがちな古文・漢文の授業、そこから生じると考えられるところの市販の教科書ガイド、所謂「あんちょこ」に頼ろうとする生徒の風潮、加えて古典に対する興味の低さに起因するものかと思う。この、1年生の古語辞典利用状況、漢和辞典利用状況を抜かすと、全体としては、予習時と受験勉強を含めた試験前に辞書利用が集中していることがわかる。予習時と試験前というのは、最も自発的に自らの頭を働かせて学習する時間である。さぞかし辞書から多くのことを学び取っているだろうと期待できるところだ。しかし、実際問題としては、国語科に関する限り、辞書を利用するとはいえ、授業中に語句の意味を質問しても、又、試験で同様な質問をしても、はかばかしい答えは得られないのが普通である。そこで、質問⑤「どの位辞書を引くのか」を見てみると、案の定、「どちらかというとな少ない」という解答が全学年を通じて多い。この基準は生徒自身に任せただけで個人差はあるわけだが、辞書を引くことは引くがあまり細かいところまでは詮索していない、検討していないというのが生徒の実情であり、実感であるようだ。国語力の向上に辞書を十分供しようとする態度はあまりないということになるだろうか。これに対し、英和辞典は、「利用せず」という解答が見事3学年を通じて0であったのもさることながら、辞書を引く割合も「多い」が3分の2前後を示すというのは驚異的である。これだけ辞書を利用する体制ができていれば、英語の読解力が急激に伸びることにも頷ける。最後に質問⑦「辞書の必要性をどの位感じているか」だが、「大いに感じる」「ある程度感じる」を合わせると、国語辞典91.4%、古語辞典83.1%、漢和辞典48.2%、英和辞典98.7%という結果が得られる。よく利用するものほど、それに対する評価も高いということであろう。

2. 表現力について

新指導要領では、表現力の向上ということが大きく取り上げられている。「表

現」といった場合、これには「話すこと」「書くこと」の2つがある。

まず「話すこと」について、現場にいて感ずることを2点述べておこう。第1は、授業中手を挙げて自ら発言することが非常に少ないということである。教師が質問を投げかけたのに対し、手を挙げる生徒はクラスに2・3名いるかどうか。そして、その程度も、学期が進むにつれて減少し、教師の方に顔を向けて意見があることを表情に表わしながらも、手は迷いの形をとって、結局挙げずに終わってしまう。大半は、質問が発せられるや否や教科書に目を落とし、顔を決して前に向けようとはしないのである。第2には、意見を述べる場合に、途中でことが切れたまま後が続かなかったり、又、文末の部分が不明確になったままで意見を終わらせようとするものである。これは授業中に限らず、教師と生徒の間の日常の会話の中でも多く見られる。教師に何か用件を述べる時に単語しか言わないケースが目につく。単語だけでも言えばまだしもであって、何も言わずにただ物を手渡すというケースもある。このような現状であるから、授業はなかなか思うようには進まない。話すという表現力の不足、或いはそれが発揮されないことのために、高校段階で求められる程度に理解を深めていくことに思いがけない時間がかかるのである。

さて、「書くこと」についてはどうか。新指導要領では、作文にあてる時間数を年間の授業数の10分の2以上から週1時間程度つまり4分の1程度へと増やしている。しかし、まとまった時間を取りにくいのが現状である。生徒の作文について感ずることをあげておこう。それは、短い時間に割合無難にこなしているということである。文章として特に良くもなく悪くもなく、内容的に当り障りもない。思っていることが素直に文章になっている。これは、話すことについて見られることと好対照といえるかもしれないが、考えてみると、この2つのことは1つのことに発するものではなからうか。つまり、自分の考えを人に伝えるためにわかりやすく組み立て直すことが不得意だということである。組み立て直せないからぼつぼつと細切れに話すのであるし、組み立て直せないから思っていることをそのまま夢中に書き表わすのである。

「話すこと」と「書くこと」—— いかにしてこの2つの力を伸ばしていくのか、教師自身最も効果的な指導方法を掴みきれていない。まずは、各々について、

生徒自身がどのような考えを持っているかを知ることが大切であろう。そこでアンケート調査を行なった結果は次の通りである。

a 話すことについて

質問①手を挙げて発言をすることについて

どう思いますか？

		1 年 (人)	2 年 (人)	3 年 (人)	計 (人)
A	1 大切である	34	20	26	80
	2 どちらかという大切である	58	63	51	172
	3 どちらかという大切でない	10	9	11	30
	4 大切ではない	4	6	16	26
	無 効	1	1	3	5
B	1 必要なので手を挙げたいという気持ちである	10	4	11	25
	2 必要なので手を挙げたいが、とても挙げられないという気持ちが先に立つ	46	41	41	128
	3 手を挙げて発言してもあまり意味がなさそうなので、する気はない	19	18	19	56
	4 手を挙げて発言するという気持ちは全く起こらない	24	33	32	89
	無 効	8	3	4	15

②手を挙げて発言する人が多くなったら、授業はどうなると思いますか？

1	おもしろくなる	39	26	35	100
2	どちらかというとおもしろくなる	35	46	21	102
3	変わらない	24	21	29	74
4	どちらかというつまらなくなる	9	4	11	24
5	つまらなくなる	0	2	6	8
	無 効	0	0	5	5

③人前で意見を述べるのが好きですか？

	1 年 (人)	2 年 (人)	3 年 (人)	計 (人)
1 好きである	2	4	7	13
2 どちらかというが好きである	28	24	20	72
3 どちらかというと嫌いである	52	46	53	151
4 嫌い	21	25	24	70
無 効	4	0	3	7

④人前で意見を述べる力は、これからの
社会生活の中で必要だと思いますか？

1 必要である	72	72	86	230
2 どちらかというと必要である	33	26	18	77
3 どちらかというと不要である	1	0	0	1
4 不要である	1	1	3	5
無 効	0	0	0	0

⑤人前で意見を述べる力をつける必要性
を感じますか？

1 大いに感じる	50	40	58	148
2 ある程度感じる	50	55	43	148
3 あまり感じない	7	2	3	12
4 感じない	0	2	3	5
無 効	0	0	0	0

b 書くことについて

質問①文章を書くのが好きですか？

1 好きである	16	19	24	59
2 どちらかというが好きである	23	22	22	67
3 どちらかというと嫌いである	11	15	15	41
4 嫌い	16	12	17	45
5 書く内容により差が激しくどちら ともいえない	41	30	29	100
無 効	0	1	0	1

②文章を書く力はこれからの社会生活
の中で必要だと思いますか？

	1 年 (人)	2 年 (人)	3 年 (人)	計 (人)
1 必要である	57	56	69	182
2 どちらかという必要である	43	36	32	111
3 どちらかという不要である	7	4	4	15
4 不要である	0	3	2	5
無 効	0	0	0	0

③文章を書く力をつける必要性を感じますか？

	45	47	68	160
1 大いに感じる	45	47	68	160
2 ある程度感じる	52	48	32	132
3 あまり感じない	10	3	5	18
4 感じない	0	1	2	3
無 効	0	0	0	0

④今、どのような文章を書きたいですか？

	43	44	55	142
1 短いもの（原稿用紙1枚程度）	43	44	55	142
2 中位のもの（原稿用紙3枚程度）	40	33	23	96
3 長いもの（原稿用紙5枚以上）	12	9	10	31
無 効	12	13	19	44

話すことについての結果を見てみると、授業中手を挙げて発言することに対する生徒の複雑な心理が窺える。質問①Aで手を挙げて発言することが「大切である」「どちらかという大切である」と答えた者が252人であるのに対して、積極的に手を挙げる意志のある者は僅か25人、手を挙げたくても何らかの理由で挙げるができないという気持ちが強い者が128人を占める。40%の生徒が手を挙げたい、手を挙げる必要があると感じながらも、思いきって挙げるができないという葛藤にさいなまされて授業に臨んでいる。又、授業中に手を挙げて発言することに意味を感じない、或いは手を挙げて発言する気が全く起こらないという生徒が46%に及んでおり、教師の指導力の欠如、「国語」という

授業の難しさ改めて考えさせられる。質問②「手を挙げて発言する者が多くなったら授業はどうなるか」について、202人、64.5%の生徒が「おもしろくなる」「どちらかというとおもしろくなる」と答えている。前の結果と合わせてみると、手を挙げて発言することは大切だが実際の授業では無意味であるような気がする、しかしみんなが発言したら授業はおもしろくなるであろうという、かなり錯綜した考えを持った生徒が中にあることがわかり興味を引かれるが、授業に積極的に参加できたらという気持ちがこんなにも多くの生徒にあったのかということに驚かされる。質問④「これからの社会生活で人前で意見を述べる力が必要であるか」に対し、「必要である」「どちらかという必要である」と答えた者は98.1%、又、力をつける必要性を感じる者も94.6%を占める。教師が日頃生徒について思っていること——話す力の欠如を生徒自身もよく自覚し、その克服を願っているわけで、教師はできるだけの助力をせねばなるまい。

話すことについて学年毎の差は特に見受けられなかったが、書くことについても同様である。質問②「文章を書く力がこれからの社会生活の中で必要か」という質問に対し、93.6%の者は「必要である」「どちらかという必要である」と答え、又、文章を書く力をつける必要性も93.3%の者が「大いに感じる」「ある程度感じている」わけだ。学習指導要領の記述とは別に、生徒自らの希望から書く力の向上も求められているのである。最後に、現在どのような文章を書きたいかについての具体的な答えとして多かったものを記しておこう。それは、「今思っていることを何でも素直に書きたい」「自分の気持ちを感情をありのままに書きたい」「自分の考えていることをずらずらと書き並べてみたい」ということだ。生徒は、日頃自分の胸の中にあるものをそっくりそのまま外に表わすことを強く望んでいる。手紙・日記・詩、そして自分の思いを膨らませた形のものとして童話、SF小説、推理小説など。この傾向を掴み、教科書の表現単元の教材を有効に使って作文の時間を考えてみることは、無意味なことではあるまい。

おわりに

「生徒の発達段階に応じて適切な学習活動を組織し、効果的に指導するようにする」(注3)——これは大変重要な事柄である。生徒の実態を把握することな

くして学校教育はあり得ない。しかし、年々変わりゆく生徒を目の前にして、その実態を教師はどの程度知り得ているのだろうか。昨年、一昨年、更には一昨昨年と同じ感覚で、黙りこくった生徒を相手に授業をしていることはないだろうか。新学習指導要領が行なわれて2年。その趣旨の実現を図るような指導の実際はまだ模索状態である。生徒を度外視した学習指導要領であってはならない。独りよがりの授業であってはならない。今回のアンケート調査は生徒の実態のごく一部を知るものにすぎないが、模索する教師の一人として、ここで得たことを今後の国語科教育に役立てていきたい。

以 上

注1. 以上引用部は、『高等学校学習指導要領解説 国語編』（昭和54年5月文部省）による。尚、傍点は筆者の付したものである。

注2. 『高等学校学習指導要領』（昭和53年8月）の国語Ⅰ〔言語事項〕のウ

注3. 同上書の国語Ⅰ「指導計画の作成に関する事項」の抄録